

集約した意見について

質問 2 ●中学校期

再編を実施したところ（匹見、真砂、小野）の状況を知る委員にこれまで実施した再編の内容確認と、その他に知る中学校の状況と今後どうあるべきかを確認しました。

匹見地区

良かったと思う点

- ・ 匹見地域においては、小学校、中学校の同一校舎運営による 9 年間だけでなく、保育所を含めた 15 年教育として地域が幼児児童生徒の学びを支えている。
- ・ 保育所から安心して小学校に行かせることができる。
- ・ 先生が児童・生徒の状況をしっかり把握してくれている。
- ・ 同じ校舎に小中学生がいることで、中学校の英語教員が小学生に英語を教えるなど専門の教員を効果的に活用されている。
- ・ 保育園、小学校と中学校の連携によって、幅広い知識や経験を共有しやすく、サポート体制が強化されている。
- ・ 小中一貫の同一校舎によって地域の一体感が高まっている。
- ・ 地元住民も含めた行事や交流の機会が増えることで、地域の活性化につながる。
- ・ 地域社会全体で子どもたちを見守り、支える体制が構築されている。
- ・ 学期の 2 期制など新しい試みを取り入れることができた。

悪かったと思う点

- ・ 成長過程において、切磋琢磨しにくい。
- ・ 小人数であることから携わる人が同じとなり、交流が限られる。
- ・ 距離があることもあってか、突発的な問題に臨機応変に対応してもらえない。

益田東中

良かったと思う点

- ・ 6 かるプロジェクトを例として、地域の各公民館との協力により地域と学校、生徒が関わりを持ち、地域全体で子どもの学びを支えることが進められている。
- ・ 再編に伴い新たに校区となった地域を含め、活発な活動をしている。

悪かったと思う点

- ・ 真砂地区からの登下校は、再編に伴う遠距離となることからスクールタクシーを用いることとなった。学校、保護者、教育委員会の間で乗車に関する取り決めなどの合意形成に時間を要した。

真砂地区

良かったと思う点

- ・ 真砂地区においては、益田市立地域活性化交流館として地域の既存施設（小学校・公民館・保育所・診療所）の集約化・多機能化を進める拠点施設が整備され、地域に活力が生まれている。
- ・ 益田市立地域活性化交流館に住民が気軽に立ち寄ってくれる。
- ・ 地域の住民が公民館にお茶を飲みながらお話しをしてくれる。
- ・ 子どもから高齢者までが集える地域コミュニティの中心施設として地域づくりが進んでいると感じる。

小野地区

良かったと思う点

- ・ 小野地区については、つろうて子育て協議会が中学校と連携して活動を行う等充実が図られています。
- ・ 小野地区の児童生徒が高津小中学校での交流学习を通じて、学校再編による環境変化に対応、順応できるように進めている。
- ・ 学校再編に伴う通学面、生活面、学習面の不安解消が図られている状況です。
- ・ 部活の選択肢が見込める等、再編の方向で進み良かったと思う。

悪かったと思う点

- ・ 学校と地域をつなぐコーディネーターは、個人の力量や経験によるところが大きく関与するので、これまで同様の活動が難しい状況である。
- ・ 再編への子どもの適応に対し、保護者の方が適応できていない。
- ・ 地域のコーディネーターが未配置となり、公民館職員が担っている状況があります。

●中学校期について

良かったと思う点

- ・ つろうて子育て協議会、コミュニティースクールを通じて、地域と小学校が連携し、学校を核とした地域づくりが進んでいる状況が見られる。
- ・ 小学校で導入しているつろうて子育て協議会と連携し、活動・交流を行っている。
- ・ 各学校で益田東中学校の6かるプロジェクトのように地域の各公民館や住民と関わりを持つようになってきた。
- ・ 基本指針に示すライフキャリア教育のように地域の特色を生かして進められており、今後も進めていただきたい。

悪かったと思う点

(1) 生徒・学校との関わり

- ・ 小規模校においては、生徒に対して過干渉になり、過保護にしている。
- ・ 小学校期よりも特に子どもを真ん中に据えた仕組が十分ではない。
- ・ 中学生は小学生に比べ、部活の練習であったり、大会であったりで忙しく、地域の活動等に参加が出来ておらず、多くの人と関わっていない。
- ・ 小学校と比べ、校区の範囲が広がることから保護者・学校・地域の連携がとりにくい。
- ・ 学校でライフキャリア教育を受けていることがわかりにくい。

(2) 地域とのかかわり

- ・ 地域の学校に子どもが通わないことで、地域が廃れる、子どもを取られるという思いがあるのかもしれないが、児童生徒は、通常、地元の学校であっても、再編をした先の学校であっても、学校におり、地域から離れた環境に居る。地域との活動は主に土日や特別な日ということになると考えられるが、地域が児童生徒を迎え入れる仕組を作り出すことで地域に子どもの居場所を作ることが必要である。
- ・ 学区に複数地域を含み広範囲となること、小学校で行うコミュニティースクールとメンバーが変わらない。コミュニティースクールの導入が進んでいない。
- ・ 希望する部活動等をするために校区外通学をする生徒がいる。この生徒に対し、地域の学校に通う生徒が少なくなるとして、地域から非難する声が上がることがある。

(3) 教育環境の充実

- ・ 学校を絞り施設等（トイレ等）の教育環境の充実を図ってはどうか。
- ・ 通学においてスクールバス・タクシーの利用が欠かせない。
- ・ 近年、大学入学試験においても総合型選抜試験の割合が大きくなっており、学力だけではない評価が広がっている状況にある。部活に学習に忙しい高校生も出来るだけ外に出て活動するように取り組んでいる。現在入学している高校生において、コロナ禍の影響もあり、自己実現のための体験が不足していると考えられ、自身による発言や自己表現が上手ではない生徒が見られる。

質問 3 ●中学校期

基本指針に中学生は集団の中での社会性を養うことが重要な時期であり、中学校は1学年複数クラスの確保を目標とするべきとしていますがそのように考えますか。

中学校期においては、あり方について、概ね5つの意見がありました。

1. 令和10年に限らず、将来推計を見据え、生徒数の多い3校へ再編を考えるべき

- ・ 令和10年までに限らず、今後の生徒の推移を踏まえ、3校に絞る方向で考えるのはどうか。その3校を重点的に整備し、教育環境の充実を図ってはどうか。

2. 高校生や社会人になるにあたっては、社会性を養うためにも複数クラス確保が良い

- ・ 限られた人数で小さいところからの兄弟みたいな温室的な環境の中で学校生活をしているが、中学校期においては、今後を見据え、限られた人間関係の中ではなく、心をすり減らすこともあるかもしれないが、同年代に揉まれてほしい。
- ・ 小規模であることによって子どもに過干渉になり、過保護にしている部分がある。子どもには、様々な経験や体験をさせることが必要であり、転ばないようにするよりも転んでも立ち上がれるようにすべきである。
- ・ 複数クラスあるとクラス替え等ができ、生徒が固定化（いじめ等に対応できる）しないのではないか。

3. 複数クラスよりもクラス内の人数が多い方が社会性は養われる

- ・ 複数クラスが望ましいが、クラス数よりも1学年20人程度であれば切磋琢磨が行われ、基本指針に示すあり方にそぐわないのではないか。
- ・ 中学生期において、1学年30人程度いけば良いのではないかとと思われる
- ・ 1学年36名となって、18名が2クラスよりもクラスの人数が多い方が良いのではないか。
- ・ 30人から40人であっても心の形成がされることと思われる

4. 学年の人数が少なくても社会性は養われる

- ・ 少人数には、少人数のメリットがある。1個人において活動の中で担うべき役割が多く、主体性を持って活動することが考えられる。このことにより社会性が養われることが考えられる
- ・ 生徒にとって、生徒数が多い学校ばかりが良いとは限らない。生徒数が多くない学校を望むのであれば、そこに行けるような形があっても良いと考えられる。

5. 地域毎に環境や状況が異なるので、地域性も考慮に入れ、地域で学校のあり方を導くべきである

- ・ 地域で育むことを考えれば、このまま各学校を残すべきではないか。
その上で、地域（地域、生徒、保護者）として今後の生徒の推移等を踏まえ、各学校の今後のあり方を考え、判断すべきではないか。
- ・ 地域で育むことを考えると、生徒、保護者が望む方向を地域ごとの考え方で進めて良いのではないか。
- ・ 希望する部活動等をするために校区外就学をする生徒がいる。この生徒に対し、地域の学校に通う生徒が少なくなるとして、地域から非難する声が上がることがある。地域としても子どもを中心とした視点に立って、地域の子どものやりたいことの後押しができる環境を整えるべきである。

基本指針（P 1 1）

● 基本指針の中学校のあり方について

（２）中学校

- ア．発達段階における中学生の時期は、思春期を迎える同世代によるコミュニティをしっかりと構築することを通して、その集団の中での社会性を養うことが重要な時期である。
- イ．中学校は教科担任制をとっているため、小規模になることで教科担当教員の配置が課題となる。また、課外活動も制限される。
- ウ．この時期は、小学校以上に生徒男女比のバランスも考慮しなければならない。
- エ．地域の多様な大人と関わっていく活動は、学校という枠から自らが育った公民館等を中心とした地域にそのフィールドを移していくべきである。
- オ．中学校期における学校教育、また、ひとづくりの考え方を踏まえていくなれば、小学校とは異なる考え方で教育環境を検討する。
- カ．相手を思いやる心や、子ども同士で支え合う気持ちを育むためにも、より多くの同世代の中で「学び合い学習」等の機会を多く創出していく。
- キ．保幼小中高の更なる連携や課外活動の充実など、他市からも益田市の中学校で学びたいと思えるような中学校としていく。
- ク．再編によって通学に相当の時間を要することとなる地区においては、別途検討する。

【 中学校 】

思春期段階にあるこの時期は、同世代によるコミュニティによって、しっかりと社会性を身に着けることが必要な時期である。中学校期における「ひとづくり」を推進していく上でも、1 学年複数クラス（36 名以上）の確保を目標とし、再編を検討する。

ただし、その地域のよさや課題について小中学校期を通して学び、ふるさとを誇りに思う子どもが多く育つ中学校を目指すよう別途検討する。

実施計画（P4）

● 中学校のあり方実現に向けた再編具体像

4. 中学校のあり方実現に向けた再編の具体像

基本指針に、中学生期は、「思春期を迎える同世代によるコミュニティをしっかりと構築することを通して、その集団の中での社会性を養うことが重要な時期」と位置付け、中学校は「中学校期における『ひとつづくり』を推進していく上でも、1 学年複数クラス（36 名以上）の確保を目標とし、再編を検討する」ことを考え方として進めることを示しております。

中学生が自己の形成や社会性を身につけて行くために必要な、同世代との活動環境を確保するためにも、学校規模だけではなく、前計画において再編を行った学校の状況や通学区域、通学距離、学校施設の状況を踏まえた学校配置の見直しの検討を図っていくこととします。

このことから、再編を行うにあたっては、中学校のあり方の実現に向け、次の各項目を再編の具体像として掲げ、進めて行くこととします。

【中学校のあり方実現に向けた再編の具体像】

- ① 今後10年先までを想定した再編への取組が必要であり、そのためにも中学校の現状を考慮して、隣接する学校との再編を検討する。
- ② 具体的な考え方を検討する上では、再編対象となる学校との距離や生徒、保護者の負担軽減を考慮し、公共交通機関などの生活幹線道路に沿った先にある学校であることや再編を行った場合の生徒数が対応できる学校施設を持っていることなどの理由を以て検討する。
- ③ 上記事項を基に計画期間を定め、市内中学校数の具体像をあげ、児童・生徒の教育環境の充実を図るべく、学校再編を進めていくこととする。

この【中学校のあり方実現に向けた再編の具体像】を基に検討を進めるとともに、「2. 市内小中学校児童・生徒の現状」に示した今後の生徒数、学級数の推移、将来推計における状況を参考に中学校区における子どもの保護者等と十分な協議を行いながら再編を検討していくこととします。